



スタンフォード大学経済学部准教授 小島 武仁

経済理論による実践的的制度設計

受賞を大変喜んでおり、審査委員の皆様にもまずお礼を申し上げたい。また今まで研究を続けてこられたのは学生時代の指導教官、共同研究者、同僚、学生の皆様、そして家族のおかげであり、この場を借りて感謝の言葉を捧げたい。

私の研究分野は人やモノ・サービスをどう引き合わせるかを研究する「マッチング理論」と、その応用分野である「マーケットデザイン」だ。特に、政府やNPOなどによる割り当てのように価格メカニズムによる「見えざる手」が働きにくい状況で、代わりに一定のルール（アルゴリズム）を使った、いわば「見える手」による制度設計について研究を続けてきた。例えば地方自治体が学校選択制度を運用するとき、応募者にどんな情報を提出してもらい、どのように各学校への入学者を決めるアルゴリズムを使えばなるべく多くの学生の希望が叶うのか。この問題について、諸外国では研究者がNPOや政府と協力して制度設計を実際に行い多大な成果を上げている。

マッチング理論は抽象的で一般性の高い数学理論ではあるが、私の研究の多くは日本の社会問題に着想を得たものだ。例えば日本では研修医を研修病院に配属するのに諸外国と類似したマッチング制度を使っているが、研修医の都市部への一極集中を防ぐために、都道府県別の研修医数に上限が設けられている。カリフォルニア大学の鎌田雄一郎氏との共同研究ではこの制度では過剰なアンマッチなどの無駄が起きることを指摘し、都道府県別上限を守りながらもマッチングを改善する制度を開発した。その後、田村明久・横尾真・和光純各氏など多くの日本人を含む研究者との共同研究で改善を重ねており、実用に耐えうるものができるようになったと自負している。

最新の研究では保育園の問題を分析した。2016年に「日本死ね」のブログで話題になったように、日本において（認可）保育園不足が叫ばれて久しい。ところが様々な事情により、ある年齢の定員は埋まっているが他の年齢の定員は余っている保育園が多く見られる。このミスマッチを解決するために追加募集などの政策を行っている自治体もあるが、現状では後追いの制度設計になっている。最新論文ではこうしたミスマッチを防ぐ新方式を開発し、山形市と文京区に頂いたデータを使

い新方式の効果を測定した。

ここに挙げた医療や保育の問題など、日本社会には数多くの問題が山積しているが、解決のために我々研究者が貢献できることはたくさんあると思っている。日本社会に興味を持つ社会学者として、今後も研究を進め、その知見を社会に還元していきたい。

こじま ふひと

03年東京大卒。08年ハーバード大Ph.D.（経済学）取得。スタンフォード大経済学部助教授などを経て、13年から同准教授。主な論文に“*Incentives and Stability in Large Two-sided Matching Markets*”（共著、*American Economic Review*）、“*Designing Random Allocation Mechanism: Theory and applications*”（共著、*American Economic Review*）、“*Asymptotic Equivalence of Probabilistic Serial and Random Priority Mechanisms*”（共著、*Econometrica*）、“*Substitutes and Stability for Matching with Contracts*”（共著、*Journal of Economic Theory*）などがある。1979年東京都生まれ。